

彼は密度波理論は、局所中立波という考えから今や大局不安定モードという考えに発展しており、観測的な銀河円盤の固有モードの確認分離が望まれることを強調した。この点については全く同感である。他に理論面では、回転対称でない重力ポテンシャル中のガス流の運動を解くと、渦状又は棒渦状衝撃波が発生するという計算が、複数のグループ (J. ハントレー, R. H. サンダース, S. A. ソレンセン他, 等) により成されたのが目立った。

研究会を締めくくるにあたって、銀河の国際データベースを作ろうという提案がドゥ・ボークールールから成された。今や銀河研究は表面測光・速度場・中性水素分布等々のそれぞれ整いつつある観測的情報を集約して、総合的に研究すべき時代になったからというわけである。この提案は、本研究会の直後モントリオールで開かれた第17回 IAU 総会のコミッション28で、正式に提案されたが、その場では具体的な結論は得られず、懸案事項として委員長 B. ウェスターlund に判断を一任することとなった。

最後に日本の銀河研究の現状についての私の印象を述べさせてもらうことにする。銀河の表面測光と理論の分野では、優れた研究が根づいていると言っても良いと思う。しかし光学的分光観測と電波観測については、世界のレベルから大きく立ち遅れていると言わざるを得ない。後者については、現在建設が進められている大型宇宙電波望遠鏡の完成に期するところ大であるが、前者については、何といっても空が暗くシーイングの良い場所に大型光学望遠鏡を早急に設置することが望まれる。立地条件は銀河観測の場合、観測対象が微光であるだけにデータの質の死命を制するといえる。また特に分光観測に関連しては、微弱な光を効率良く記録するために、レ

チコンや CCD のような固体受光素子の応用基礎研究が非常に重要である。以前から感じていたことではあったが、オースチンの銀河研究会に参加して、これらのことを確信するようになった。(家 正則)

Schwassmann-Wachmann 第3周期彗星 (1979g) の回帰

オーストラリアの Parth 天文台の Candy によると、8月13日 (UT) に同天文台の J. Johnston と M. Bahagiar の両氏は、はくちょう座に13等級の彗星を発見した。

この彗星は、その後の観測から表記の彗星の回帰であることが判明した。この彗星は1930年にドイツの Bergedolf 天文台の Schwassmann と Wachmann によって発見され、周期 5.43 年の周期彗星であることが判っていたが、その後、今回の検出まで行方不明になっていたものである。

なお、ついでながら、Bradfield (1979c) 彗星以後の発見は、Russell (1979d) 新周期彗星, Torres (1979e) 新彗星, Holmes (1979f) 周期彗星, Kowal (1979h) 新彗星と表記の Schwassmann-Wachmann 3 彗星である。

(1979 Sept. 5 香西洋樹)

訂 正

本誌12月号の学会だより I. 昭和55年度科学研究費補助金配分審査委員候補者のうち第1段審査委員候補者の氏名の順序を下記のように訂正すると共にお詫び致します。

第1段審査委員候補者: 加藤正二, 内田豊, 高窪啓弥

1979年10月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	14,	180	6	—,	—	11	14,	142	16	16,	145	21	21,	164	26	13,	128
2	—,	—	7	—,	—	12	13,	152	17	14,	147	22	18,	131	27	10,	96
3	—,	—	8	17,	178	13	12,	118	18	—,	—	23	16,	121	28	9,	102
4	—,	—	9	14,	145	14	15,	142	19	—,	—	24	—,	—	29	—,	—
5	13,	101	10	17,	163	15	16,	160	20	20,	158	25	14,	154	30	15,	150
															31	15,	169

(相対数月平均値: 209.7)

昭和54年12月20日	発行人	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
印刷発行	印刷所	〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町251	啓文堂 松本印刷
定価 300 円	発行所	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
		電話 三鷹 31局 (0422-31) 1359	振替口座 東京 6-1 3 5 9 5